

## 卒論

ルッキズムと整形の普及・手軽化が進む現在、ルッキズム  
に飲み込まれないために若者が出来ることは

早稲田大学政治経済学部政治学科4年 石川琴音

## 概要

現在、容姿や考え方、宗教、国籍などあらゆるテーマで「多様性」を認めようとする動きが日本のみならず全世界で起きている。その中でも、日本で特に話題に挙がるのは肌の色や体型を始めとする“容姿”に関する多様性である。東京五輪でタレントの渡辺直美さんを豚に見立てる演出を行おうとした男性が炎上し、辞任に追い込まれた件は記憶にも新しい。このように“容姿”に関する多様性は特にシビアな話題となっており、より一層多様性を重視することが求められる分野となっている。その一方で、容姿の“美醜”については美しさが重要視されたり、美しいものが得をしたりする傾向が強くなっている。その象徴として「ルッキズム」という言葉を度々耳にするようになった。更に、このことと関連して美容整形の普及も加速していると考えられる。美容整形の普及はエイジングケアなどに関心を持ち始める年配層のみならず、10代の若者にまで広がっている。そこで、本ルポルタージュではルッキズムの傾向が強くなり、美容整形も身近になっている現代日本社会で、若者が容姿に対して過度に悩んだり、整形依存症になったりするなど、ルッキズムに飲み込まれて負の影響を受けないためにはどうしたらよいか、容姿とどう向き合うべきなのかについて明らかにすることとした。

この問題を明らかにすべく、まずは様々な文献を参考に美容整形やルッキズムの歴史についてまとめた。そのうえで、見た目問題に取り組むNPO団体を始めとする様々な有識者へのインタビューなどを実施した。そしてインタビューや執筆を通して、ルッキズムは「個人が自己満足的に見た目を気にしたり重要視したりする側面は残り続けるが、第三者が人を害する攻撃的な側面は徐々に消えていく」という結論に至った。また、若者がルッキズムに飲みこまれないためには「内面などの質の部分重要視し、その考え方が社会全体に浸透していくこと」が必要だということが明らかになった。そして、最後には社会全体の考え方を変えていくためにはどうしたらよいかについて、メディアの在り方について触れつつまとめている。